碧い閃光

月野将行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
碧い閃光

【Ｎコード】
Ｎ６８４９Ｑ

【作者名】
月野将行

【あらすじ】
とある宇宙の彼方にある惑星、セルガイア。
そこは過去に起こった事件をきっかけに、邪悪で非情で凶悪な怪物が蔓延る大地。そこで人々は、怪物に殺されないよう対策を練りながら生きている。
そんな世界に存在する小さな村、クレーナ村に住む少年は村長の頼みで村を出て王都へ向かうことになった。それが、彼の人生を大きく動かすことになるとも知らずに……。

契約と誓いと同様、進行は亀ですが、読んでいただけたら幸いです。

一部鋼殻のレギオス、テイルズを連想することがあるかもしれませんが、その辺りは目を瞑って下さい。

誤字脱字があれば教えて欲しいです。

プロローグ

――ＬＤ１５３２。

『それ』をみた人々は己の目を疑っただろう。ある者は夢だと現実から目をそらしただろう。

ただ、『それ』は確かにこちらに近づいてきていた。音もなく、ただただその大きな体を見せつけこちらに近づいて来ていたのだ。

そしてＬＤ１５３３。

肉眼で見えるようになってから一年、ついに巨大隕石は大地に激突し、多くの生命は一瞬にして失われた。

だがその圧倒的な破壊だけでは物足りないのか、巨大隕石が落下してきた後、大地には異形の怪物が姿を現し、生命達を踏みつけ喰らい、我が物顔で君臨し始めた。

巨大隕石の落下地点から離れていて助かった人々までもが犠牲になっていく。

人々は武器を持って立ち上がりこれらをなんとか撃退して、人が集まるまる場所は危険と思い込ませ村には入って来ないようにすることに成功した。

しかし、それは一時しのぎにしか過ぎない、怪物達が増え続けるという根本的な解決には至っておらず、町や村の外は危険ということに代わりはないのだ。

そんな時、小さな村に住む、病床についていた一人の老人が死ぬ間際にこう言った。

碧き閃光がこの地に生まれ
碧き閃光が闇を打ち砕きし時
悪の根源は打ち滅ぼされ
世界に再び平和と正しき理が
取り戻されるあろう

そして、それから五百年の時が流れた……。

第一話『旅立ち』

とある小高い丘の上に小さな村があった。
いつものように空には太陽が昇り、村には放牧された羊や山羊、牛などが自由気ままに歩き回り、その横で小さな子供達が仲良く笑い合いながら追いかけっこをしている。そんなほのぼのとした村中に男の怒声が響き渡った。
「コラァァァァ！　こんのクソガキィィィィィィ！」
村の真ん中にある通りを碧い閃光がヒュンッ、と駆け抜けていく。通りにいた大人や子供、家畜達はなんとはなしそれを眺め、それから少し遅れて息を乱した金髪の初老の男性がやってきた。
「ぜぇ、ぜぇ……くそ、全然追いつけん……」
「ああ、やっぱりまたやられたの？」
膝に手をついて立ち止まった初老の男性に、近くにいた長い茶の髪が目を引く若い女性が苦笑しつつそう尋ねた。
「ぜぇ、ぜぇ……うむ、今日は鯵の干物が三匹だ……」
「素早さに自身がある分、試したくなるんでしょうね……。まあ大丈夫でしょ、またダガンに怒られてすぐ戻ってくるわよ」
「ううむ……」
男性は渋い顔をしながらも女性に言われたことに頷き、もと来た道をゆっくりと帰っていく。
その後姿を見送り、大人や子供、家畜達は再びそれぞれの動きを始めた。

「へへ、今日もうまくいったぜ」
右手に魚の干物を三つ掴んだ少年は楽しそうに笑いながら、碧い髪を風になびかせながら走っていた。
少年は村の真ん中にある通りを突っ切り、突き当たりにある回りにある民家より少しばかり大きな建物に向かって走っている。

「わはははは！疾風のごとき速さを誇る我に、盗れぬ物などなし！」
建物に入るなり碧髪の少年は干物を掲げてそう叫んだ。すると、奥のほうから幼いまだ幼い子供達が五人、わらわらと出てきて彼の回りに群がり、キラキラした瞳で彼と、彼の右手の中にある獲物を見つめる。
「流石リー兄、村一番の足は伊達じゃないね」
「さすがさすが！」
「かっこいいなぁ……」
子供達が褒め称えてくるのに対し少年がそうだろうそうだろうと鼻を高くしていると、彼の後ろにそっと影が忍び寄ってきた。それを見て子供達は口を止め、げっ、といった表情をになる。
「？　どうしたんだ皆？」
「どうしたもこうしたもない」
後ろから声がしたと思った途端、彼の後頭部に鈍い痛みが走った。
「あだっ！」
痛みに顔をしかめ、左手で痛む箇所をさすりながら振り返る少年。そこには白くなった髪を首の後ろ辺りで束ね、あとは適当に放置した初老の男性が右拳固めて立っていた。彼を見てさらにしかめっ面になった少年に嘆息し、小さくうなだれる。
「まったくおまえは……。説教は後にする。とりあえず、その右手にある盗品を今すぐ返してきなさい。ちゃんと謝罪の言葉もつけてな」
有無を言わせぬその物言いに少年は口を尖らせつつ小さく頷いた。
「親父の石頭め……」
碧髪の少年はそう愚痴りながら、干物を右手に不満そうにクレーナ村を歩いていた。
彼の名前はリード。このレストリア国の北端に位置するクレーナ村の住人だ。山の上にあるクレーナ村はこれといった特別なものが

あるわけでもない普通な田舎の村で、子供は親によく懐き、親も子供をしっかりと愛し、人も家畜も暢気に暮らしている。ただ、彼の場合は正確には親がいない。もっと詳しく言うならば肉親がいない。

もともと彼は孤児で、村の入り口で泣き叫んでいたところを孤児院の院長を勤めているさっきリードの頭を殴った男性、ダガン・マルサス拾われたのだ。まだ生まれて間もなかった彼はその時のことを覚えてはいないが、しっかりとそのことはダガンから聞いている。だが、彼が愛情を持って接してくれていることはきちんと理解しており、ダガンのことを親父と呼んでいる。

惑星セルガイアには三つの大きな大陸がある。そのうちの一つサーヴィン大陸、その東端にリードの住む村、クレーナ村を有したレストリア国が存在している。

巨大隕石が落ちたのはおよそ五百年前のこと。落下時の莫大なエネルギーによってセルガイアは多大な被害を受け、地表に住む多くの生き物が死滅してしまった。さらに、どうなっているのかセルガイアには異形の怪物、隕獣（いんじゅう）が姿を現し、人々はなんとか町や村には入ってこないようにすることには成功したものの、未だ外には隕獣達がうごめき自分の住む町村からは誰もあまり出ようとはしない。

ただ、隕獣に対抗する手段がないわけではない。人間の体内には『彪（ひょう）』と呼ばれる力が流れている。人によって個人差はあるが、その力は誰もが使えるもので隕獣とも戦うことのできる人間達にとって最大の武器、それが『彪』である。

「ちぇっ、いいじゃんか、干物の一匹や二匹……」

「三匹、でしょ」

不意に横からした声にリードは首を動かした。その先には茶色い髪を長く伸ばした女性がクスクスと笑っている。

「シェイラさん」

「またやらかしたんですってね。バースさん、怒ってたわよ」

女性はリードの横まで来ると、彼の頭を軽く小突いた。彼女の名前はシェイラ・ハートフィールド。歳は三十代後半辺りだろうか。クレーナ村の村長、モルヴ・ハートフィールドの義理の娘である。
「今回で何度目っだっけ？」
「十二連勝！」
「ほんと凄いけど……、毎回怒られてるのによく懲りないわね」
「まあ、弟達も喜んでくれるからつい……」
苦笑するリードを慈愛に満ちた微笑みで見つめながら、シェイラは自分の目線より上にある碧い髪を優しく撫でる。
「でも、悪いことは悪いことよ」
「分かってる、今からちゃんと返しにいくよ。親父にも殴られたし……」
ぼそっと愚痴る少年にシェイラはクスッと笑った。
「あ、そうそう、後で私の家に来てね。お義父様がリードに話があるらしいから」
「？　わかった」
首をかしげつつとりあえず頷き、リードは食材屋へと赴く。散々怒鳴られ、殴りかかってくる店のおじさんのパンチをあざけるように全てかわして、彼はすたすたと食材屋を後にした。
「さて、とりあえずモルじいんとこに行くか」
先程来た道を戻るリード。時々すれ違う人や家畜達に手を振ったりしながら歩き、今度は空を眺めながら歩き始めた。空は真っ青で、点々とある白い雲が自分の存在を誇示しながらゆったりと流れって行く。
「なーに空見てあほな顔してんよ」
「え？」
突然正面から聞こえてきた棘のある言葉にリードは首を下ろして前を向く。いつの間にいたのか、呆れたような表情を浮かべながら少女が一人、短めの髪と同じ色の茶色い瞳を彼に向けながら片手を腰に当てて立っていた。

「ミューリィ！」
少女の名はミューリィ・ハートフィールド。この村の村長の孫娘であると同時にリードの幼馴染である。
なかなかに気が強く、昔から悪戯をするリードをよく叱っていた。あまり効果はなかったようだが……。ダガンや孤児院の兄弟達と同じ、もしくはそれ以上に親しいと言える程の存在だ。
「こんなとこで何やってんだ、ミューリィ」
「それはこっちのセリフ。リードこそこんなとこで何やってるの？」
「俺？　俺はモルじいに呼ばれて今からミューリィん家に行くとこだけど」
「お祖父様に？　何かしら」
リードは悪戯をしたことでわざわざ呼ばれたりはしない。呼んでも呼んでもきりがないからだ。
「さあなぁ。とりあえず行くには行かないと。ミューリィはどうする？」
「私も今はこれと言ってやることがあるわけでもないし、そうね。うん、私も行く」
ミューリィは頷き、リード横を歩きだした。
しばらくすると孤児院よりは小さいものの、他の民家よりは少し大きい家が見えてきた。屋根の上にある大きな木製の車輪がよく目立っている。
ミューリィの家だ。
「モルじいー、呼んだかー？」
「ただいまー」
中に入るなりリードは叫び、ミューリィは簡単に言う。
「おお、来たかリー坊。ミューリィもおかえり」
入ってすぐにある広間の真ん中で、頭頂部だけきれいに地肌を出し残りは全て真っ白な髪をした老人がずずっとお茶を啜っていた。その横には何故かダガンが座っている。
何事だといぶかしみながらも二人の前に行き、リードは床に尻を

つけて楽な姿勢をとった。その横でミューリィは正座をして居住まいを正してダガンに挨拶をする。
「こんにちは、おじさん」
「こんにちは」
小さく頷くダガン。
「で？　モルじいに呼ばれたって聞いてたんだけど、親父もいるって事は何か余程のことなのか？」
「うむ」
コトン、モルヴは湯飲みを自分の前に置き、真剣な顔でリードをまっすぐに見据えた。
「リー坊。おぬしに一つ頼みたいことがあるのじゃ」
「頼みたいこと？」
「うむ。実はじゃな」
モルヴは懐からおもむろに一通の手紙を取り出し、自分の前に置いた。
「これをレストリア王のもとに届けてほしいのじゃ」
「レストリア王に？」
モルヴの言っている言葉にリードは少々驚いた。レストリア王はクレーナ村から歩いて十日の王都ザリアスにいる。それはつまり隕獣のいる村の外へ出ろ、と言っているのと同じということだ。
「なんでわざわざ？　定期的に来る郵送馬車じゃ駄目なのか？」
「ああ。ものがものなだけに郵送馬車では他人に見られないとも限らないから不安でな。信の置ける村の者が持っていくべきなのだ」
今度はダガンだ。だが、その言葉に反応したのはリードだけではなかったらしく、ミューリィはおずおずとダガンと祖父の様子をうかがうように口を開いた。
「あの、そのレストリア王に届ける手紙にはいったい何が書かれているんですか？」
「すまんが、それは言えんのじゃ。これは町村の長とその町村を守護する者以外に教えるわけにはいかんことでな」

「わかった。けど、それでなんで俺なんだ？　そんなに大事なものなら俺よりも誰か大人を行かすべきだと思うんだけど」
　リードが首をかしげると、モルヴは再びお茶を啜りそれからリードを見てフッと優しい笑みを浮かべた。
「それはじゃな、この村の守護者であるダガンを除けば、おぬしがこの村で最も強い戦士だからじゃよ」
　ダガン・マルサスはクレーナ村で剣を教えており、リードはそこの門弟でもある。他にも格闘術を教えているところもあるが、そういうほかの武術も全て含んだ中で、リードはダガンに次ぐ実力者なのだ。つまり実質的にこの村で二番目に強いということになる。ちなみにミューリィは格闘術を習っていて、リード程ではないにしろそこらの大人なら倒すことができる。
　モルヴは続ける。
「知っての通り、村の外には隕獣がおる。だが、普通の民ではそうそう隕獣に対抗できん。そこで、強い者を選びたいのじゃがこの村を隕獣から守っているダガンをこの村から離すわけにはいかんでな、そこで……」
「リード、おまえの出番というわけだ」
　モルヴの言葉をダガンが引き継いだ。
　リードは頷く。
「外に出れる人間の中で一番強い俺に届けてほしい、てことか」
「ああ。頼めるか？」
　もちろん、とリードは答えようとした。しかし、それを一つの大きな声が遮り彼の返事をかき消してしまう。
「駄目です！」
　びっくりしてリードは一瞬肩を震わせる。そしてびっくりした状態のまま、大声で怒鳴り立ち上がっているミューリィに目を向けた。
「そんな危険な目にリードをあわせたくありません！」
「ああ。確かにミューリィの意見はもっともだ。だが、私達は別にリードに無理強いするつもりはない。リードが無理なら他の者を探

す。それで、リード。改めて聞くがどうだ？」
「ああ、いいぜ」
リードは二つ返事で了承し、それに驚いているミューリィを他所にリードはモルヴがら手紙を受け取った。
「いつ出発すればいい？」
「できるだけ早いほうがいいのう。ことは一刻をあらそうからの」
「リード、出発する前に鍛冶屋のザロームのところに寄っていけ」
「わかった。んじゃ親父、モルじい、また後でな」
それだけ言うとリードは立ち上がり、立ったまま固まっているミューリィの手を引いてハートフィールド家を後にした。
残されたダガンとモルヴは二人を見送ってから小さくため息をついた。
「できれば、あんな幼い子を村から出したくはないんじゃがのう……」
「だが仕方がない。村のためには、な……」

ハートフィールド家を出てからまずリード達はバッグを取りに行き、必要な物をバッグのの中に詰め、雑貨屋で旅に必要なものを買い揃えてそのまま鍛冶屋へと向かっている。
だがさっきからミューリィは俯いたままずっと黙りこくっていて一言も発しない。
「どうしたんだよミューリィ。さっきから元気ないぞ」
痺れを切らしたリードは振り返りそう尋ねた。
「……決まってるでしょ」
そう言ってミューリィは顔を上げた。目に今にもこぼれそうなくらいに涙を湛えて。
「ッ！？」
「リードが村を出ていくとか言い出すからでしょ！　何でよ、何でリードが行かなきゃならないのよ！？」
泣きそうに、というかもうほとんど泣いてしまっているミューリ

ィにあわてるリード。
「いや、だって誰かが行かなきゃならないんだし……」
「だったらリードじゃなくてもいいじゃない！　……何で断らなかったのよ」
「……俺さ」
リードはミューリィの頭にそっと手を乗せる。
「？」
「もともとこの村から出てみたいって思ってたんだよ。隕獣に怯えてこの小さな村にひっそりとして、外界とは郵送馬車でしか繋がっていないこの小さな世界から……。多分俺は親父の跡を継いでクレーナ村の守護者になる。そしたらもうきっと村の外には出られない。だから、今回の旅は親父やモルじいの意思だけじゃなくて俺の意思でもあるんだよ」
「リード……」
「きっとすぐに帰ってくる。だからさ、ミューリィ。泣かないでくれよ」
「……泣いてなん、か、ない……」
「……そうだな」
親指の腹でミューリィの涙を拭い、リードはミューリィに背を向け歩き出す。
「ほら、次はザロームの親方んところだ。行こうぜ」
「うん……」
ミューリィは乱暴に自分の腕で目元をこすり、リードの後を追った。
そうしてついたのは鍛冶屋。屋根から突き出した煙突からポンポンと白い煙が出ているところを見ると今も炉に火を入れているのだろう。
ここはリードが十六歳になった時に働かせてもらう予定になっているところでもあり、当然鍛冶屋の親方と面識もあり仲も良い。歳はダガンと同じくらい離れているものの、友達のような付き合いを

している。だが、リードが悪いことをした時は鍛冶で鍛えた太い腕で制裁をくわえてくる恐い存在でもあるのだが。
リードに続きミューリィが中に入る。中は台所やちゃぶ台、座布団があり、いたって普通の家だ。そこらに金鎚ややっとこが落ちていなかったらの話だが……。
「おーい、ザロームー！　……聞こえてないな。ミューリィ、行くぞ」
「うん」
部屋の奥に鉄の扉がありリードはそれを力いっぱい押して開けた。途端に中からむっとした空気が押し寄せ熱が流れてくる。暗い奥のほうでは轟々と酸素が燃焼されている音が聞こえてくる。
足元や壁にかけてある鍛冶道具に気をつけながら奥へと進んでいく二人。
しばらくすると、ぼんやりと赤い光が見えてきた。鍛冶炉だ。その横でガタイのいい人影が一人、鉄でできた台の前に座り込んでなにやらいじっている。
リードは再び呼びかけた。
「ザロームー！」
「ああ！？」
今度は聞こえたらしく、人影はこちらに顔を向けてきた。その両目には緑色のゴーグルがはめられている。
「おお、リードに村長さんとこのお孫さんか！　どうした！？」
言うなり人影は再び顔を台に向けなにやらをいじりだす。
ここでは常時大きな音がしているので大声で話さなければ声が届かない。リードも声を張り上げた。
「親父とモルじいにここに来いって言われたんだけど！」
「そのことか！　ちょっと待ってろ、もうすぐできる！」
（できる……？）
人影の言葉に首を二人は首をかしげながらもとりあえず最初の部屋へと戻り、そこらに転がっていた座布団の上に座る。

それから五分、鉄扉がギィィときしみながら開き、奥から二メートルは優に越える巨大な禿頭の男が現れた。男は右手に黒い何かを握り締めていて、それをちゃぶ台の上にドンッ、と置くと自分も座布団を適当に引っ張ってきてそれに尻を乗せ、そして二人を見てニヤリと笑う。
「よう、リードに村長さんとこのお嬢さん。今日は二人でデートかい？」
「なっ！？　そ、そそそんなわけないじゃないですか！　いや、無きにしも非ずというかその……！」
「……おいミューリィ。いい加減ザロームのからかいに慣れろ」
真っ赤になって首を振り、そして少し首をかしげるミューリィにリードは呆れたように言い、禿頭の男、ザロームは楽しそうに笑う。
「ガハハハハハ！　いやはや、やっぱりお嬢さんはおもしろい！」
「え？　……もう、からかわないでください！」
「すまんすまん、つい、な」
「つい、じゃありません！」
もうっ、と顔を赤くしてそっぽを向くミューリィ。だがこれはリードとミューリィが二人でザロームのところへ来た時のいつもの光景なため、リードは彼女をスルーしてザロームと向き合う。
「ザローム、俺、この村を出てザリアスに行くことになったんだ。それで親父とモルじいから出発する前にここに来たんだけど……何でなんだ？」
「そいつはな、これだ」
そう言ってザロームはさっきちゃぶ台の上に置いた黒い物体を指差した。手のひらに収まるくらいのサイズで、見た目には金属でできているように見えるがよくは分からない。
「これは何なんですか？」
いつの間にか元に戻ったミューリィがザロームに話しかける。するとザロームはニヤリと笑い、答えた。
「これは収束器（デバイス）だ」

「収束器？　これが？」
「おう、俺の力作だ」
収束器とは遥か昔から作られていた人間達の武器の名称だ。持ち歩く時は手のひらに収まる程にコンパクトだが、あるワードを言うことで空気中に漂う必要な物質を引き寄せ形成、武器をその場に作り出す隕獣や人と戦うのに使うものである。
「ほら、使ってみろ」
ポイッと投げられた収束器を片手で掴み、リードは立ち上がる。そして収束器を前に突き出しワードを唱えた。
「顕現」
すると収束器は一瞬光り、直後一振りの剣がリードの手の中に現れた。
思わずリードはため息を漏らす。
「すげぇ……」
「外は危険だからな。絶対ちゃんと帰ってきて俺の下で働けよ」
ザロームは右手をリードに差し出した。ゴツくてでかく、しかし温かいそれをしっかりの握り締めリードはニッとを笑って応える。
「おう！」

鍛冶屋を後にしたリードは収束器をズボンの横についている袋に入れ、準備ができたのでモルヴとダガンのところへ向かっている。
「なあ、ミューリィ」
突然リードはそう言った。
「何？」
「……いや、やっぱりなんでもない」
「何よ、煮え切らないわね。途中まで言ったんなら最後まで言いなさいよ」
「その、俺達ってさ、今までずっと一緒にいただろ？　今度俺が帰ってきた時も今まで通り接してくれるか……？」
リードの不安そうに言う言葉にミューリィはしばらく呆然として

いたが、
「……プッ」
「ちょっ、何でそこで笑うんだよ！」
「ごめんごめん、リードがあまりにも当たり前なこと言うから、つい……。まあでも、そんなこと聞くまでもないでしょ？」
ああ、と嬉しそうに笑うリードに自然とミューリィも笑顔になる。
（ここが俺の場所なんだ。旅に出ても、ここが、俺の家なんだ……）

「戻ってきたぜー」
「ただいまー」
ハートフィールド家に入るなり二人はそう言って座る二人。
「準備はできたぞ」
「うむ」
「ああ。ところでリード。おまえはウチの孤児院の者が十六歳になった時に姓を名乗るようになることは知っているな」
「ああ。そりゃ知ってるけど……それがどうかしたのか？」
「まだおまえは十五だが、これから村の外へと出る。その際に姓がないというのはなかなか信頼を得るのが難しくなるのだ。だからな、これからお前は姓名を名乗れ」
「いいのか！？」
孤児院の仲間からすると、姓を持っている者は格好良く思えるのだ。それはリードも例外ではない。
「ああ。何か良い姓はあるか？　ないなら私が決めてやるが」
「ちょっと待ってくれ……うぅ～ん……」
リードが唸ること一分。
「決めた！　ストライフ、俺は今日からリード・ストライフだ！」
「ストライフ、か……。リード・ストライフ殿」
「な、何だよ改まって……気味が悪いぞモルじい」
引き気味のリードを気にせずモルヴは静かに頭を下げる。
「今回の件、どうぞよろしくお願いします」

「ど、どうしたのお祖父様？」
戸惑うリードとミューリィにダガンが丁寧に説明する。
「孤児院からの出身者が姓を持つ時、それは一人前になったという証だ。だから村長はリードを一人の男として認め、頭を下げているんだ」
「うむ。リー坊や」
「早速戻るんかい！」
「やはり一人前になっても、リー坊はリー坊じゃからのう」
楽しげに笑うモルヴにリードはがっくりと肩を落とした。
「それでじゃな、リー坊。今一度聞くが、本当に頼んでも良いのじゃな？」
「ああ、まかせろ。正直わくわくしてるし、今から出発するぜ」
「そうか。では、村の入り口まで見送ろう」

村の入り口に行くまで四人は終始無言だった。村人達も村長とその孫娘、さらに村の守護者とその子供の悪戯小僧という不思議な組み合わせに首をかしげていたが、二組の家庭という括りにしてあっさり納得してそれぞれの仕事ややっていることに注意を戻していた。
入り口に着き、リードがバッグを背負いなおすとダガンがリードの名を呼んだ。
「リード」
「うん？」
ダガンは自分のポケットから何かを掴むとリードに向かって放り投げた。リードはしっかりとそれを受け取り目をやると、それは木で作られた一つの腕輪だった。、粗雑ながらも一生懸命に作ったというのがわかるような温かみが感じられ、腕輪の表面にはアレックス、ネリス、カイン、ハーツ、ユリアと五つの名前が彫られている。
「これは？」
「おまえの大切な家族達がおまえのために作ってくれていたんだ。前に、リードが旅に出ることになるかもしれんと言ったら慌ててそ

れを作っていた」
「そっか……」
少し目を細めてその腕輪を眺め、彼はその腕輪を自分の右腕に嵌めた。
「それと、これがこの辺りの地図と方位針（コンパス）だ。最初に鉱山の町、コレッタに寄ることになるから、詳しい地図が欲しいならここで買え。少ないがこっちは金だ。旅で必要ならいくらでも他人に頼るんだぞ」
「おう」
ダガンから地図と方位針、それに金を千五百ジェム受け取ったリードはそれらをバッグに入れ、三人に向き直った。ダガンとモルヴもリードを見るが、ミューリィは俯いていて顔を上げようとはせず、ただただ地面を見つめている。
「じゃあ、いってくる」
それだけ言ってリードはくるりと背中を向け、一度も振り返らずに走っていった。
「……」
しばらくの間、誰一人口を開こうとはしなかったが、リードの背中が完全に見えなくなるとミューリィはその場に崩れ落ちた。そんな孫娘の姿にモルヴはそっと彼女の頭に手を置き優しく撫でる。
「本当は一緒に行きたかったんじゃろう？」
肩を震わせながらミューリィは小さく頷く。しかし、今のミューリィでは旅についていっても足手まといなること分かりきっている。だからこそ、ミューリィは行きたいというその一言を必死で呑み込んでいたのだ。
「大丈夫だ」
ダガンは静かにそう告げた。
「おじさん……」
「リードの力は私がよく知っている。そこらの隕獣に負けるようなことはないことくらい、君も分かっているだろう？」
「はい……」

ミューリィは小さく答え、ついさっきリードが走っていった方向を見つめる。

この旅に出ることに、リードが首を横に振っていてくれたら、とありえない望みをその胸に抱きながら。

第二話『銀髪の剣士』

村を出たリードは道なりに歩いていた。
村の横にある森にはない木々や草などに目を奪われながらリードは笑顔で歩く。空には雲一つなく、太陽光が道を歩くリードにさんさんと照りつける。
道の横に大きな木を見つけ、リードはその木陰で休憩すろことにした。自分の横に背負っていたバッグを置き、木にもたれかかるようにして座る。
「村の外って、思ったよりすごくきれいな場所なんだな。隕獣(いんじゅう)がいるくらいだからものすごい荒れたところなんだと思ってたんだけど」
両手を頭上で組んで天に向かって大きく伸ばす。さらに一つ欠伸をしてリードは木にもたれかかったまま目を閉じた。
さわさわと上から木の葉が風に揺られて擦られる音がし、木漏れ日が瞼を閉じた瞳に少しばかりの光を感じる。
「？」
しかし、頭の上から聞こえてくる木の葉の音以外に何かが聞こえた気がした。そう、何か大きな獣が唸るような、そんな音が。
リードは目を開けて立ち上がり、辺り目を配る。
と、他の近くの木の陰から一匹の獣が姿を現した。その姿は一見ただの犬。しかし、体全体が紫色で眼が黄色く、その体リードと同じくらいの大きさでなければ、だが。
「隕獣かっ！」
反射的にリードは横へ跳んだ。
「グオォォォォッ！」
次の瞬間、ついさっきまでリードがいたところに隕獣が飛び込んできた。
「うわっ」
何とか避けたリードは袋から収束器(デバイス)を取り出し、ワードを唱える。

「顕現」
リードの手の中に一振りの剣が現れ、しっかりとそれを握り締めて隕獣に切っ先を向ける。隕獣が一声唸り、再び飛び掛かってくるがリードは天高く跳び、これを回避した。着地と同時に後ろを振り向き、今度は隕獣目掛けて跳び上がる。そして、その紫色の背中目掛けて一気に振り下ろした。
「砕破断！」
振り下ろした剣の通りに赤い線が入り、体を左右に分けて隕獣は倒れた。
しばらくして隕獣の体は風化し、風に流された粒子が散っていく。
「はぁ、はぁ……これが隕獣か……」
息を整えながら剣を元の収束器に戻し、風に吹かれて消えていく紫色の亡骸を見つめる。
「でも、思ったほどじゃなかったな。この辺りのは弱いのか？」
元の木まで戻りバッグを拾って中から水を取り出す。少し飲んで口を湿らして、弱かったとはいえ武術の心得がない者には厳しい世界なのだというのを改めて実感した。流石にここでは寝られないと判断し、バッグを肩に担ぐと再び道を下る。

そしてそれから三度ほど犬のような隕獣と遭遇したが難なく撃退し、ようやく目的の町、コレッタに到着した。
「すげぇ……」
到着早々、リードは口をあんぐりと開け、馬鹿みたいに町の入り口で立ち止まってしまう。
何故かといえば、町中のいたるところを二本の鉄の線が平行に走り、それに沿うように車輪をつけた箱が走っていたからだ。少し離れたところにある洞窟にそれらが入っていき、逆に出てきた箱は中に大量の石の塊を載せてどこかへと走っていく。目で追ってみると石を載せた箱はいくつかに別れて大きな建物の中へと入っていている。ただ、どの建物にも共通するように上から巨大な煙突が立って

おり、そのどれもから猛烈に水蒸気を噴出していた。
　いつまでもあほみたいに入り口で突っ立ている余所者に気づいたのか、緑色のつなぎを着てヘルメットを被ったガタイのいい男がリードのところへやってきた。
「おい、そこの坊主。鉱山の町に来るのは初めてか？」
「え？」
　突然した低く大きな声で我に返りリードははっとする。そして目の前に巨大な緑があることに気づき、びっくりしてそのまま後ろへと転んでしまう。
「うわっ」
「おいおい、人を見てうわっ、はねぇだろ坊主」
　苦笑するような声にリードが顔を上げると大きな男が笑ってこっちに手を差し伸べている。
　ありがたくリードはその手を取り、立ち上がらせてもらうととりあえず謝罪した。
「すいません、気がついたら目の前に緑の壁があったから……」
「なに、気にしちゃいないさ。ところで坊主はここに何しに来たんだ？　ここには鉱山で働くようなモン以外、来る理由のないところなんだが」
「ここより上にあるクレーナ村から来たんです。ちょっと首都まで行く用事があって、それでここへは途中にあるから寄らせてもらったんです」
　それを聞くと男はびっくりしたように目を丸くした。
「じゃあ坊主は一人でここまで来たのか！？　俺はてっきり郵送馬車の者かと思ってたんだが……。坊主、おまえの名前は？」
「リード・ストライフです」
「俺はオーク・ドムレスだ。まあ立ち話もなんだし、とりあえず俺の、というか俺たちの家に来い。今俺もちょうど休憩時間だったからな」
「あ、はい」

なんだか勝手に流されている気がしないでもないが何故かそう咄嗟に答えてしまった。それを見てオークはニッと笑うと歩き出し、リードもそれについていく。
ただ、この鉱山の町というのはなかなかに危険なものだった。たくさんの箱が辺りをびゅんびゅんと走り回り、リードは何度も轢かれそうになってしまったのだ。その度にオークがリードを引っ張り安全圏へと移動させていなければ彼は今頃大怪我をしていただろう。
リードは五度目の『轢かれそう』になり、オークにフードを引っ張られてなんとか箱を回避させてもらう。
「すいません……」
「いいってことよ。こんな町じゃなけりゃトロッコなんて走ってないだろうしな」
「トロッコ……？」
「あのさっきから走り回っているあの箱のことだ」
オークはあごをしゃくって目の前を走っている箱を示した。
「鉱山の中で採掘された鉱石をトロッコに積んで、あの大きな煙突が立ってる精製所へと持っていくんだ。そこで積んでた荷物を降ろして、採掘所に戻っていく。こうすることで楽に、しかも早く精製所へと持って行けるんだ」
「へぇ……」
「すごいだろ。まあ、たまにトロッコに轢かれて全治三ヶ月の怪我をする奴もいるがな」
「……」
リードは改めて思った。トロッコは危険なものなのだと。
そうしてなんとかオークに助けてもらいながら彼の言う『家』へと到着した。
「おお、おかえりオーク！」
中に入るなりそんな声が飛んできた。体格のいいオークの後ろにいたリードは中の様子が見えず体を少し横にずらした。中ではオークと同じくらいにガタイのいい男たちが数人おり、それぞれが酒を

飲んだりトランプをしたりと、かなり楽しんでいるように見える。
奥のほうに階段があり、その上にいくつかのつなぎが無造作に脱ぎ捨てられている。と、トランプをしていた坊主頭の男がオークを振り返り、その横から飛び出している小さな少年に気がついた。
「オーク、そっちの小僧は何だ？　まさか隠し子か？」
その言葉にそこにいた全員が振り返りオーク、そしてその横の子供を見る。
ニヤニヤしながら言う坊主頭をオークは鼻で笑い飛ばす。
「なわけあるか。さっき町の入り口で突っ立てたんだよ。何でも、国王のお膝元まで用事があるんだとさ」
「王都ザリアスまでか？　そらご苦労なこったなあ」
酒を飲んでいた男が驚きながら歩いてくると、持っていたコップをリードに差し出した。むわっと漂ってくる酒特有の臭いにリードは少し顔をしかめた。
「飲むか？　つか飲むよな？　つーか飲め、ほらグイッと」
「ばーか、なに未成年に酒飲まそうとしてんだテメーは」
言いながらオークはそのコップを奪い取り自分が飲んだ。
「酒は心の栄養剤だろ？」
「リードにはまだ劇薬だ」
オークはそう言ってリードを連れてそこらにあるテーブルに向かい、適当に椅子に腰掛けた。その回りにさっきまでトランプをやっていた男達も寄ってくる。
「なあ坊主、おまえさんここまでやってくる間に隕獣と遭遇したか？　俺達全員、ここまで来るのに護送馬車に乗ってきたから隕獣を見たことがねえんだよ。遭遇したときは俺達が中にいる間に護衛の人達が倒してくれたからさ」
「そうなんですか。はい遭遇しましたよ。でも、思ったほど強くなかったですけど」
「そうなのか？　そりゃ、坊主は相当な実力者なわけだ」
「いや、そんなことは……」

それから男達に質問攻めに会い、話すこと二十分、リードは重要なことを思い出した。
「あの、オークさん」
「何だ？」
「ここって、どこに店があるんですか？　買っておかないといけないものがあるんですけど」
「この家だ。店、酒場、食事処、宿、全てをここでやっているんだ。どうした、何か必要なものでもあったのか？」
「はい、地図が欲しいんです。今持っているのがクレーナ村の付近しか載っていないものだから、首都に行くまでに使えないから」
ふむ、とオークは頷きカウンターの奥へ行くとなにやらごそごそと漁り始め、しばらくしてから戻ってきた。
「これでいいか？」
そう言って見せてきたのは少し黄ばみ、所々破けた古ぼけた紙の筒だった。広げてみると、このレストリア王国の全土、そして町や村が記載されている。
「いいんですか？　なんだか、とっても年季の入ったものみたいですけど……」
「ああ、どうせここで働くモンには必要ないしな。金も要らん。リードみたいな坊主から金を巻き上げなきゃならんほど困ってない」
「ありがとうございます、オークさん、それに皆さんも」
深々とリードが頭を下げるとオーク達は楽しそうに笑っていた。
いつまでもコレッタにいるわけにもいかず、リードはそろそろ行くと言い、オーク達に見送られコレッタを後にした。
また来いよー、いつでも酒飲ましてやるからなー、などと叫んでいるのを背に受けながらリードは町の横にあるダヴィール坑道へと侵入した。この坑道を通ったほうが王都ザリアスへの近道になると、オーク達から聞いたからだ。
中の空気はひんやりとしていてどことなく澄んでいる気がする。坑道は狭い空間だから空気が濁っているイメージがあったのだが、

それはただの勘違いだったようだ。
去り際に受け取ったランタンの明かりを頼りにリードは中を進んでいく。
「確か、最初にある十字路を右に曲がって、それからまっすぐって言ってたよな」
どうやらこの坑道には隕獣は出現しないらしい。リードは楽々進んでいき、いくつか横道にそれる通路があったが全て無視して進んでいると、ようやく十字路に辿り着いた。十字路を右、と頭の中で繰り返し、右へ曲がろうとした時、

グオォォォォォ

「ッ！？」
左のほうから聞こえてきた腹の底に響くような、しかしそれでいてどこか心がすっきりとする重低音にリードははっと振り返った。しかし、ランタンを掲げてもその先はただの暗闇しか見えない。
「……」
気にはなったが、そんな好奇心よりも行ってはならないという本能がそちらへ足を動かすことを拒んでいた。しばらく十字路で立ち止まっていたが、本能に従いやはり右への道を選ぶ。
先ほどの未知の感覚に混乱しながらもリードは暗闇の中をランタン一つを頼りに歩いていると、出口らしき光が見えてきた。ダッと駆け出し一気に闇を駆け抜ける。
そこはやはり出口で、外に出た途端に襲い掛かってくる太陽光に目を細くする。少しして目が辺りの光量に慣れてきてリードが辺りを見渡すと、正面のほうに小さな町が見えた。
「あれがケニー……、ッ！？」
その時、真横から何かが急接近してくるのを感じ、リードは真正面に飛び込んだ。
直後、彼の後ろを大きな何かが通り過ぎる。急いで体勢を立て直

してリードが後ろを振り返ると、そこには全長十五メートルはあろうかという巨大な紫色の蛇がいた。大蛇は横に避けた小さな獲物を睨みつけ、二メートル近くある大きな双牙を剥いて彼を威嚇する。
「こいつ……レヴィナスか！？」
隕獣には基本的に名前がない。だが、時折名前をつけられる隕獣もいる。
名前をつけられる隕獣はかなり強いものが多い。今まで多くの人間を殺してきたものに与えられ、そのほとんどは近くの村によって懸賞金がかけられており、その強さに応じてランクが分けられ賞金の額が変わる。その賞金首を倒すためにギルドというものが作られ、多くの村や町に存在し、賞金首の体の一部を持ってギルドへ行き、それを倒したと判断してもらえば賞金をもらえるという仕組みだ。
クレーナ村は比較的平和だったためにギルドというものはなかったが、それでも強い隕獣の噂くらいは流れてくる。
（レヴィナスっていったらこの辺りの主でランクはBだったよな……。百パーセント無理だ）
勝ち目がないとリードはすぐに判断し、レヴィナスと視線を合わせながらじりじりとケニーのほうへ移動していく。そこで、レヴィナスは再びリードに突進してきたがリードはそれをかろうじて横に飛んで避け、レヴィナスがその勢いを殺せずに進み続けている間にダッと走った。そして近場の木に身を隠しリードは陰から少し顔を出して様子を窺う。
止まったレヴィナスは辺りを鎌首をもたげ、辺りをキョロキョロと見回していたが獲物の姿が見つからず、諦めたのかそのままどこかへ去っていった。
レヴィナスの姿が完全に見えなくなるとリードはふうっとため息をついた。
（あー、マジで死ぬかと思った……）
あんなのを倒せる奴いるのかよ、とリードはぼやきながら周囲を警戒しつつケニーへと向かう。

途中何度かウサギが額に一本の角を生やしたようなのやらやたらゴツゴツした皮膚をもったトカゲのような隕獣と戦ったが、なんとか撃破した。一度かなり危険な状態になったが、クレーナ村の雑貨屋で買った炎石(えんせき)も投げつけて隕獣を爆破し、倒した後にバッグに詰めておいたセージという薬草を食べて傷を治した。

そうしながら進むうちに、ようやく橋上の町ケニーの入り口へと辿り着いた。

「やっと着いた……」

ケニーはローサス川という大きな川の上に掛けられている巨大な橋の上にある橋上都市である。川の向こう側に渡るにはこの町を通過するしかないのだが、隕獣を恐れているためか夜になるとこの町は門を閉じ人の出入りを禁じるので日が落ちている間は我慢するしかない。

すでに日は傾いており、リードはギリギリで町に入ることができた。

「危ねー、もうちょい遅かったら閉め出されてたな」

ホッと胸を撫で下ろしたリードは宿に向かい、そこで部屋の予約をするとすぐさまベッドに倒れこんだ。隕獣を相手にしながら一人で旅をしていたのだから体も心も疲労している。

食事のときには呼んでもらうようリードは宿の人に言い、そのまますぐに眠りこけた。

夢を見た。誰かが自分を見ながら叫んでいる。誰かは分からない。だがその人ははっきりとこちらを指差して怯えたように後ずさっている。だがリードはそんな彼を冷たい目で見下ろしながら収束器を剣の形にして大きく振りかぶる。

横から誰かが飛び出してきて止めようとしているのが視界に映った。しかし、リードはそちらを見向きもせず怯えているその人物目掛けて剣を振り下ろし……

「うわああっ！！」
リードは大声を上げながら飛び起きた。
荒くなっている呼吸を整えながらリードは自分の両の手をじっと見つめる。
「なんだか嫌な夢を見たような気がしたんだけど……何だったっけ……？」
とそこで扉を控えめにノックする音がしたかと思うと宿の人が静かに入ってきた。
「ストライフ様、食事の時間ですのでお呼びに来ましたが……」
「あ、はい。今いきます」
リードは頷いて下がらせ、
「腹減ったな……」
そのまますぐに部屋を出て食堂へと向かった。
どうやらここの食事はバイキング形式らしいが、食堂の中はあまり広くはなかった。宿の大きさから考えて妥当だろうが中にはリード以外の客は九人しかいない。そのうちの三人の男は悪そうな顔を突き合わせてテーブルに着き下品な笑い声を上げて食べている。どうやら酒を飲んでいるのか酔っ払っているようだ。
別のテーブルでは気の弱そうな一人は黙々と手と口を動かしている。そのまた別のテーブルでは二人組みの女性が、その横のテーブルでカップルらしい若者が食事を取りながら迷惑そうに三人のほうをちらちら見ながら食べていて、最後の一人は一番端のテーブルに腰をおろして先の一人と同じように黙々と食事を進めていた。クールな雰囲気を回りに振りまいている彼は男のリードから見ても格好良く、何より彼の銀色の髪が目立っていた。宿の者も含めてカップル以外の女性陣は先程から何度も彼のほうへ視線を向けている。
リードはうるさい三人組に顔をしかめながら食事を取りに行き必要な量だけ皿に盛ると辺りを見回し、空いたテーブルが無いようなのでしかたなく二人の女性と同じテーブルへと向かう。頼むと彼女

達はあっさりと許してくれた。他の席に座りづらいことを理解してくれたようだ。
「いただきます」
掌を合わせて一礼しリードは皿に取り分けたチキンの焼いたものを口に入れる。
うまい。リードが素直にそう思いもぐもぐと口を動かしていると、
「おい、おまえ！」
ドンッとテーブルを叩いて三人のうちの一人が立ち上がった。叩かれた衝撃でテーブルの上の皿が跳ね、料理がテーブルの上にこぼれる。
「ん？」
リードが声のしたほうを見ると、例の三人が黙って食べていた気の弱そうな男を囲むようにして立っていた。食べていた男は怯えた様子で回りを囲んでいる三人に目を向ける。
「は、はい……何ですか……？」
「何ですかじゃねえよぉ、さっきからこっちをちらちらちらちら、何か文句でもあんのかぁ？」
「い、いえ、そんなことは……」
「じゃあさっきから何なんだよ、ぁあ！？」
ダンッとテーブルを叩かれ男は肩をびくりと振るわせる。辺りがざわつく中、酔っ払い達は気づいた様子もなく男に絡む。と、酔っ払いの一人が男の飲んでいた水を掴み、
「おっとっと、手が滑っちまったぁ」
男の頭に浴びせかけた。びちゃびちゃになった男は俯いて震え、それを見て三人は腹を抱えて爆笑し、回りの者たちは困ったようにそれを見ながらもしかし巻き込まれまいとそ知らぬふりをしている。
（やりすぎだ……）
最初はリードも関わる気はなかったが、流石に三人の横暴に怒りを覚えたリードは立ち上がろうとする。だがそれよりも早く、どこからかコップが飛来してその酔っ払いの頭にぶつかり、中に入って

いた水が彼の頭にかかった。
「……」
頭から滴を垂らしながらコップが飛んできた方向にギョロリと目を向ける男。その先にあるのは一番端っこのテーブル。そのテーブルで銀髪の男が一人、黙々と食事をしている。その様子が彼らの神経を逆撫でしたのか、酔っ払い達は大声で怒鳴る。
「てめぇ、一体何のつもりだぁ！」
銀髪の男はしばらく口を動かしていたが、
「手が滑った」
それだけ言うと再び食事を再開する。
ぶち殺す！　と酔っ払い達は銀髪に殴りかかった。他の客や宿の者は小さく悲鳴をあげる。
「阿呆が……」
銀髪の男は小さくため息をつくと同時に酔っ払い達が彼に殺到した。

瞬殺だった。男達が酔っ払っていたという事実を考慮しても銀髪の男は強かった。酔っ払い達は宿の外へ放り出され、その荷物ごと捨てられた。
「すげぇ……」
呆然としているリードの視線の先で銀髪の男は女性達に囲まれながら静かに水を飲んでいる。と、リードはその銀髪の男と一瞬目が合った気がしたが、よく見る間もなく男は立ち上がりそのまま無表情で食堂を出ていった。
彼を囲んでいた女性達は些かがっかりしたようだったが、すぐに女性同士でわいわい盛り上がり始める。
リードもしばらくすると食べ終わり食堂を後にして宿の外へと出た。来る途中で軽くなったバッグの中に道具を補充するために道具（アイテム）を買いに行くのだ。
幸いなことに宿屋の向かいに雑貨屋らしき看板がぶら下がってい

るのが見えた。
「ん？　あれって……」
適当に無くなった道具を仕入れてリードは宿屋へと戻る途中、ボロボロになり縛り上げられたさっきの三人を警備の格好をした男性がどこかへと引きずっていっている。警備所に連れて行くのだろう、リードはなんとはなしにそれを眺めながら宿へと戻ろうとした。
だが、宿に入る直前に建物の裏の方で何か音がした。ブンッ、ブンッと何か長細いものを振るう音だ。気になったリードはそのまま宿屋の裏手に回る。
「あ……」
そして、そこで見た光景に思わず声が出た。
「はっ」
月の光を浴びてきらめく度に空を切り裂く音がする。さっきの銀髪の男だ。手にした細い片刃の長剣をまるで見えない敵を斬るかのように振っている。一人の人間がそれを振り回している動きそのものが、まるで芸術であるかのように思わせるほどにその動きに無駄はなく、すばやかった。
しばらくリードが呆然と眺めいていると、突然銀髪の男は手を止めリードを振り返り、彼をジロリと睨みつけた。
「何か用か？」
「あ、いえ。ただ音が聞こえてきたから何だろうと思って……。邪魔をしたならすいません」
リードは素直に頭を下げる。銀髪の男はフンッ、と鼻で笑うとリードに背を向け、再び長剣を振り始める。まるでリードがそこにいないかのようなその態度に少しイラッとするも、どちらかというと鍛錬中を邪魔したリードが悪い。仕方なしにもう一度頭を下げ、今度こそ本当に宿に入り、買ってきたものをバッグに詰めると明日に備えてすぐにベッドにもぐった。やはり村を出るのが始めてのリードは疲れが溜まっていたらしい。まどろみの中に沈んでいき、今度は嫌な夢を見ることもなく眠りについた。

「お世話になりました」
リードは宿屋のおばさんにぺこりと一礼をすると背を向けて外へ出た。
空は快晴で雲ひとつなく、町を出るには丁度良い天気だろう。
「ジムタスまで結構あるな……。昨日の時間と距離からして……ざっと二日か」
次に向かう商業の街、ジムタスまでずいぶん距離があり、一日で着くには無理がある。
護送馬車なら半日で着く距離だが、不定期な上、なかなか目的地に向かうものがない。さらに結構な金が必要でリードにはそんなことに使うほど財布に余裕もない。
野宿を覚悟し、ジムタスまでに必要になるであろう食料を買いに行く。
「すいません、その干し肉と乾燥野菜に果物、あと水を」
「はいよ。兄ちゃん一人旅？　てことは武術の心得はあるんだよな」
「まあ、一応」
袋に入れながら尋ねてくる店主にリードは頷く。
「そっかそっか。どっちに行くんだ？　オルムの平野か？　それともジェンナの草原？」
「えっと、地名は分からないですけど、これからジムタスへ向かうんです」
「そっちはジェンナの草原だな。そっちには空を飛ぶ隕獣が多いから気をつけな。はい二百ジェム」
「分かりました。ご親切にどうも」
代金を支払ってそこを後にし、この町に入ってきた時とは逆の方向へと向かう。この町はローサス川にまたがっている造りになっているため入り口は二つしかない。ここへ立ち寄る人の多くはこの両方の入り口を通ることだろう。
どこからともなく聞こえてくる轟々という水流の音に、今自分が

巨大な川の上にいるのだと改めて思わされる。
山の上の田舎村では考えられない状況に楽しさを覚えながらリードは町の入り口へと到着し、そこで見張りをしている門番に会釈をして外へと出た。
「うわぁ……」
そこでみた光景に、リードは思わず感嘆の声をあげる。
どこまでも広がる緑の平原と雲ひとつない青々とした空に浮かぶ小さく大きな太陽しかない光景。だが逆に、それだけが純粋に偉大に支配する世界は壮観なものだ。そこかしこから漂ってくる新鮮な草の香りにリードは思わず駆け出し、トン、と前方に飛び込んで受身を取るとその場で体を投げ出した。
「気持ちいいなぁ……」
ミューリィやチビ達にも、こんなに暖かな場所があることを教えてやりたいなどと思いつつ空を見て、
「……、ん？」
空を二つの点がぐるぐると動き回っていることに気がついた。と、不意にその内の一つが落下してきて、それが紫色をしているものだと気づくのにさほど時間は要さなかった。
「隕獣！」
ばっと体を反動で起こして立ち上がると、すぐさまバックステップで後ろへと下がる。ついさっきまでリードが寝転がっていたところに巨大な影が一つ激突した。体長二メートルはある巨大な鳥の隕獣だった。翼を拡げれば全長六メートルには達するだろう。一気に急降下してきたために衝撃が抜けずうまく体勢を立て直せないでいるらしく、体をリードとは逆方向へと向け、僅かばかりではあるが右にかしいでいる。
バッグを後ろへ放り投げ収束器を剣に変えて落下してきた隕獣へと向けた。
「先手必勝！　砕破……」
リードは飛び上がりその巨大な頭へと剣を振り下ろす。だが、ま

だ上で旋回していた他の隕獣がリードに突撃し彼の体は吹き飛ばされた。
「ぐあ！」
五メートル程吹き飛ばされ、そこからさらに四メートル転がってようやく止まったリードは慌てて立ち上がるが、右肩に激痛が走りその場に倒れてしまう。驚いて痛む箇所に目をやると、右の肩の付け根に直径四センチくらいの穴がぽっかりと空いてきた。暗い穴からどっと鮮血が溢れ、途端に体から力が抜け動けなくなる。
「嘘、だろ……」
ドクドクと溢れ出てくる赤いものをリードの目は信じられず、ただそれを呆然と眺めていた。このまま血が出続ければ間違いなく彼は死ぬだろう。だが今まで一度もそんな経験をしたことがないリードは己の死というのを理解できない。
「俺が、死ぬ……？　まだモルじいの手紙も届けてないんだぞ……」
地面に這いつくばって動かないリードを見て、もう抵抗することができないと踏んだのだろう。二体の隕獣は空へと舞い上がり、動かない獲物へと上空から狙いを定めて迫る。
リードは目を瞑ることもそらすこともできず、ただただそれらを見つめ続ける。
「死にたくない……」
思わず出た言葉がそれだった。初めて感じた死への恐怖。だが、時すでに遅く、彼にはもうできることは何もなかった。
死ぬ。確かにそう思ったその時、不意に背後から緑色をした何かが彼の上をよぎった。何なのか確かめる間もなくそれは隕獣の片方へと命中し、その体を容赦なく真っ二つに切り裂いていた。当たらなかったほうの隕獣は慌てて上空へと舞い逃げる。
「戦い方を知らんようなガキは外を出歩くな。出歩くならその前に下準備と、それ相応の覚悟を持っておけ」
「え……」
後ろから聞こえた声にリードは思わず声をあげる。だが声の主は

リードの返事を無視して側にしゃがみこむと彼の体に何かを無理やりねじ込んだ。
「食え。とりあえず止血にはなる」
言われた通りにリードが口を動かすと、香草独特の香りが口の中に充満した。セージだ、と飲み込みながら理解する。
肩の痛みが和らぎリードは上体を起こし、薬草をくれた声の主を初めて見た。太陽が逆光になっていて顔はよく見えないが、風になびく銀色の髪と、その手が握る細い片刃の長剣には見覚えがある。
リードが口を開こうとする前に銀髪の男は彼の横を通り前へと出、その片刃の長剣を腰溜めにして構え、声とともに一気に振り抜いた。
「飛燕閃」
斬撃の軌跡が緑色の刃となって飛び、空高く舞う怪鳥を胴辺りで切断する。
落下してきた二つの塊は一度地面でバウンドし、そのまま動かず粒子と化していく。
「ここのもこの程度か」
銀髪の男はそう呟くと長剣を収束器へと戻し、リードを振り返って腰の後ろに巻いてある小さなポーチから薬草を取り出すと、そのままリードに投げつけた。慌ててそれを受け止める。
「とりあえずそれを食え。こんなところで野垂れ死ぬ気か」
「あ、はい。ありがとうございます……」
素直にそれを口へと運び、数度咀嚼して喉を通す。先の痛みが嘘のようにひき、肩を見ると服に穴が空いているだけで傷口はどこにも見当たらなかった。セージではない。セージならここまで傷を治すことはできないはずだ。
「それはミントだ。セージよりも回復効果が高い」
「ミント……」
リードがぼうっとしている間に銀髪の男はリードのバッグを拾うと彼に放り投げた。バスッと彼の腹におとなしく収まる。
「おまえ、隕獣と戦うのは初めてじゃないんだろう？　なのに何だ、

あの無様な戦い方は」
否定しようもない彼の言葉がリードの胸を深く抉る。リードは下唇を噛み、地面に揺れる草を握り締めた。
もう一体いることが分かっていたにもかかわらず無防備に突進し、そこへカウンターを喰らってあえなくダウン。誰が見ても素人としか思えない戦い方だ。男は続ける。
「今からどこへ向かう」
「ジムタスです……」
「ジムタスか……。丁度いい、俺もそこへ向かう予定だったからな。そこまで同行してやろうか？」
突然の申し出にリードは驚きばっと顔を上げると、男は無表情のまま頷いてみせる。
「ジムタスまではここから歩いてだいたい丸二日だ。それまでにおまえの剣の腕を見てやる。その代わり、おまえは俺の飯を作れ。いいな」
食事など一人分作るも二人分作るも同じことだ。食料も念のために四日分ほど買っているから問題ないし、最悪そこらにある木々から実や葉を採取して食べればいい。元々孤児院で皆の食事を作ったり、森で遊んだりしていたリードにとって何の苦にもならないことだ。
すぐさまリードは首を立てに振った。
「はい、よろしくお願いします」
「ああ。俺の名はクロム。おまえは？」
「リード・ストライフです」
「リードだな。覚えた」
銀髪の男、クロムは小さく頷くと、小さく行くぞとだけ言って歩き出し、リードは立ち上がると慌てて後を追った。

第三話『黄泉歩きの花』

リードがクロムとともに同行しだしてから二日。道中何度も隕獣（いんじゅう）に襲われるもクロムの前では一刀の元に切り伏せられ、リードは隕獣に関しては苦労することなく旅をすることができた。だがその間、剣の腕を見てやるといってクロムと切り結ぶことになり、むしろそっちのほうが彼にとっては大変だったりしたが。

ジムタスでランクEに選ばれている、全長五メートルはあろうかという大型の鳥のような隕獣、シェルジェンテに出くわしたが、クロムと何度も手を合わせたリードにとって実力不足ということはなく、ザロームからもらった剣の刃にひびが入り使い物にならなくなってしまったものの、なんとか一人で倒すことができた。

そんなこんなで二人はようやくジムタスへと到着し、太陽を真上にしながら門をくぐる。

この街は花を多く栽培しており、街中のいたるところから花の芳しい香りが漂ってくる。花粉症アレルギーの者からしたら一生近づきたくないところではあるだろうが……。

「まずは鍛冶屋で新しい収束器（デバイス）を買うことだな」

街へ入るなりクロムはリードにそう言った。

リードもズボンにしまってある収束器を思い出して小さく頷いてみせる。

「一緒に行けるのはここまでだ。後は野垂れ死ぬなりなんなり好きにしろ」

無表情のままクロムはそう告げた。リードは慌てて頭を下げる。

「ありがとうございました。おかげで助かりました」

「勘違いをするな。道中で世話をする者が欲しかったから、それで代わりにおまえの腕をみただけだ」

「それでも、ありがとうございました」

なおも頭を下げるリードをフンッと鼻で笑いクロムは背を向け、

「おい」
「はい？」
リードがすっと頭を上げると、頭のてっぺんに何か軽いものがフワッと乗っかった。すたすたと去っていくクロムから目を離して頭の上のものを手に取ると、それはあの巨鳥シェルジェンデの羽だった。クロムのおかげだと言ってリードが彼に渡していたものだ。
「あ、あの……！」
「そんな低ランクの賞金などくれてやる。第一おまえが倒したんだ、おまえがもらっておけ。じゃあな」
それだけ言うとクロムは去っていった。
その場に残されたリードはしばらく呆然とそこに立っていたが、街の真ん中ならだいたいの情報は集めることができるだろう。まずは鍛冶屋へ行くべく街の中央広場へと目指した。
歩いている途中で食材屋を見つけ、ここへ来る途中で消費した食材を補充する。
「はいよ」
「どうも。すごくいい香りがしますね。花ばかり作っていてつぶれたりしないんですか、この街」
「おや、君旅の人かい？　そういえばあまり見ない顔だけど」
「あ、はい。王都に行く用事があって、それで……」
そっかそっかと食材屋の若い店主は頷く。
「確かに花なんかそう高いものじゃないからね、実際この街は豊かってわけでもない。でもここの街の土は花を育てるのにはうってつけでね、作られる花はいいものばかりだから結構売れるんだよ」
「そうなんですか……花のための街、って感じですね」
「ああ。……そうだ、どうせなら君も一つ買っていったらどうだい？　広場にギルドがあって、そのすぐ右の通りを行くと左手に『セリネの庭』って花屋があるんだけど、結構安く売ってるよ。店員の女の子もかわいいし」
「はあ。まあ行ってみます。あ、そうだ。ついでに教えて欲しいん

ですけど、鍛冶屋ってどこにありますか？」
「鍛冶屋はギルドの隣にあるよ。金槌の看板がぶら下がってるから分かると思うけど」
「ありがとうございます」
まいどーと明るく言う若い店主に笑って応えながらリードは中央広場へと入った。
広場の外縁部には様々な花屋が店を構え、中央には大きな噴水が設置されていた。何かの花を模しているらしく、大きな花弁を五つ開いて中央のから水を吐き出している。それを尻目にリードはきょろきょろと当たりに視線を巡らせ、金槌の看板を探した。
「あれか」
あっさりと見つけ、すぐに中へ入る。
中は普通の店と同じようにカウンターとその奥に立つ店の人、そしてカウンターの下のショーケースに並べられた形成前の収束器達があった。壁には鎧も立てられている。ただ他の店と違うのは、さらに店の人の奥に頑丈そうな鉄の扉があることだ。ザロームのところと同じく、その向こうに鍛冶をする部屋があるのだろう。
「いらっしゃい。今日はどうしたの？」
筋骨隆々という言葉が似合いそうなゴツイおっさん、ではなく人並み以上ではあるものの鍛冶をするには弱くないか？　といった感じの若い青年がそう尋ねた。ザロームしか知らないせいか、筋肉質な人意外が鍛冶屋、というイメージしかないリードが怪訝そうな顔をしているとそれを察したのか青年は苦笑した。
「俺はここの親方の弟子だよ。親方は鍛冶炉のほうにこもってる。手伝わせてもらったりはしてるんだけど、まだ一人じゃ何も打たせてくれてないんだよね」
「そうだったんですか」
「うん。ところで君、今日は何をお求めで？」
「剣を。予算はだいたい五百ジェム辺りがいいんですけど」
「剣か……剣は幅広いからなあ。初めて買うの？　今まで使ってた

のとかない？」
「あるにはありますけど……剣身にひびが入っちゃってて」
「それでいいよ。ちょっと見せてくれる？」
ズボンの袋から収束器を取り出し青年に手渡すと、彼はワードを唱えて形成させた。剣身に対して大きく斜めにひびが見える。あともう一振りでもしたら確実に折れてしまうだろう。
「あちゃー、こりゃひどいね。岩でも斬った？」
「いえ、隕獣と戦ってる時に相手の嘴を斬りつけたんですけど、予想以上に硬くて……」
あははと渇いた笑みを浮かべるリード。シェルジェンテの嘴があんなに硬いとは思わず、リードがなんとか倒した後にクロムから思い切りしかられてしまった。
「そっか。……修理はできるけど、やるにしても予約が詰まってるから完成は五日後になるんだけど、どうする？　なんだったらこっちで買い取るよ。……まあ、あんまり胸張って言える額じゃないけどさ」
「新しいのを買います」
了解とだけ言うと青年はザロームの剣を元の収束器に戻し、それをポケットに突っ込んでしゃがみこみ、ショーケースの中をがさごそと漁りだした。
待つこと数十秒。
「これだ」
青年が頭を上げた。ただ、ショーケースの中に頭を突っ込んだままなので、
「いでっ！」
もちろん頭をぶつける羽目になる。
あたたた、と後頭部をさすり涙目になりながらも彼はリードに収束器を一つ差し出した。全体的に黒色でまとめられた感じのもので、受け取ってもザロームの作ってくれた収束器と特に違和感を感じない。

「形成をしてみて」
リードは頷き、口を開く。
「顕現」
瞬間、リードの手には刃渡り七十センチほどの一振りの剣が現れた。剣身も以前の剣となんら変わりなく、違いがあるとすれば柄が黒色になったことと鍔が少し短くなったことと重量が上がったことくらいか。
「スチールソードっていうやつで、かなり普通だけどそれなりに普及してるし五百ジェムぽっきり。どう？」
三度四度素振りしてみるが、特に問題はなさそうだ。これにする、と返事をする。
代金をカウンターに置き、スチールソードを元に戻してズボンの袋に滑り込ませると鍛冶屋を後にした。
「次は……あ、そうだギルドギルド」
隣に立つ建物を見てそう呟くと、今度はそっちに足を踏み入れた。
中は人でごった返し、いくつかある丸テーブルに腰掛け酒を飲んでいる者もいる。どうやら酒場と合体しているらしい。こんな真昼間から飲むのかよと思いつつ中の様子を眺めると、どうやら男のほうが圧倒的に多いようだ。ちらほら女性も見受けられるが、ほとんどが戦士ということが一目で分かる。目つきが鋭いし、何より全員が防具をつけている。それ以外はテーブルで酒を飲んでいる男に絡みつく娼婦のような者しか見受けられない。
騒がしさとアルコールの充満した空気に戸惑いながらもリードは奥に見える受付のようなところへと向かう。
途中で何度も足を踏まれたり肩をぶつけられたりと苦労しながらなんとか受付へと辿り着いた。
「こんにちは。こちらの書類からターゲットをお選びください」
若いお姉さんがにっこりと営業スマイルでリードに重ねられた紙束を差し出してくる。
「いや、もう倒したからそれで報告に来たんですけど……これ」

そう言ってバッグからシェルジェンテの羽を取り出し受付のお姉さんに提示した。
「それは……ランクEのシェルジェンテですね。ギルドナンバーと名前をここにお願いします」
「いえ、俺ギルドに来るの今日が始めてなんですけど……」
「そうでしたか。では」
そう言ってお姉さんはカウンターの下から茶色い紙を一枚とペンを一つ取り出した。
「こちらに必要事項を記入してください。最低、お名前と年齢、出身国だけでかまいませんので」
リードは一つ頷き紙に目を走らせる。どうやら本当に大して考える必要のないものばかりが記入事項として書かれていた。名前、年齢、出身国、身長、武器、得意な戦術、エトセトラ。
適当にサラサラ書いてお姉さんに手渡す。
「……はい、確認いたしました。十五分ほどで狩猟(ハンターズライセンス)の証ができますのでそれまでおまちください」
「分かりました」
言われてリードはとりあえずギルドを後にした。十五分、と言われても特にやることがない。どうしようかなーと首を捻る。と、不意にさっきの食材屋の店主の言葉が脳裏に浮かんだ。
――『セリネの庭』って花屋があるんだけど、結構安く売ってるよ。
(暇つぶしにでも行ってみるか。たしかギルド横の通りだったよな)
リードはバッグを担ぎ直し、そこの狭い通りに入ることにした。少し薄暗くてじめついたような感じがするが、街中から漂ってくる淡く香る花の匂いがその陰気な雰囲気を打ち消している。
しばらく歩くと、先程までとは少し違う匂いがしてきた。花の香りには違いないのだが、さっきまでとは何かしら違和感を覚えるの

だ。悪い意味ではなくむしろ良い意味でだが。
特有の匂いを発していたのは、一つの花屋だった。少々ぼろくなった感じの否めない小さな花屋は、どうやら民家を利用してやっているらしい。奥のほうに立った煙突から煙が出ている。昼食の支度でもしているのだろうか。
木の扉に付いたガラス窓に汚れがないことからこの店の店主が仕事熱心、もしくは綺麗好きということが分かる。そんな店の上には『セリネの庭』の文字が描かれた看板が掛かっていた。
（ここか）
扉を押して中に入る。扉の上に付いていたベルがチリンチリンとかわいらしく鳴ってリードを迎え入れた。途端にさっきから感じていた甘い香りがぐっと増した。
たくさんの鉢やプランターが置かれ、それぞれに様々な色合いの花々が植えられており、屋内にも関わらずその花達に陽光が降り注いでいる。思わず上を見上げるとそこは天窓になっていて、今は大きく開け放たれて外の空気を取り込んでいた。
「いらっしゃいませー」
鈴のように澄んだきれいな声がした。
見上げていた顔を下ろすと、正面のすこし行ったところにあるカウンターで、茶色いロングの紙の上に白い三角巾を巻き、腰にエプロンを巻いた女性が目に付いた。歳は二十代前半くらいだろう。カウンターの下に何かあるのかごそごそとやっている。
女性は顔を上げてリードににっこりと微笑みかけた。その優しい笑みにリードは少し顔を赤くする。
「あれ？　初めてお会いになりますよね。旅の方ですか？」
「え？　……あ、はい。ザリアスに向かう途中でこの街に寄ってるんです」
「ザリアス……。そうですか。私も乗ったことあるんですけど、護送馬車って狭くて大変でしょう？　何人もの人がぎゅうぎゅう詰めになって長い間その状態が続くんですから。まあ、隕獣に襲われる

ことに比べたらなんとも言えませんけれど」
ん？　とリードは眉をひそめた。一瞬、ザリアスと聞いて女性の顔が翳った気がしたのだが、気のせいだろうか。
「いえ、俺は護送馬車じゃないんですよ。あまり待つ時間がないから徒歩なんです。今はいなくなっちゃいましたけど、ケニーからここへ来るときは強い剣士の人が一緒だったし、これでも一応俺、剣士なんで」
「徒歩で！？　それはすごい……。外の世界ってどんな……あ！」
女性は突然声をあげると、苦笑いしながら右頬をポリポリと掻く。
「すいません、さっきから勝手に質問しちゃって。友達からも好奇心旺盛すぎって言われるんですけど、どうにも……あはは」
「いや、気にしないでください」
「すいません……じゃあ改めて。わたしは、この『セリネの庭』の店長――と言っても、従業員はわたししかいないんですけど――のアリア・コルトークと申します。今日はどういった御用で？」
「いや、実は今ギルドに登録してるんですけど、時間が余って。それで来る途中で食材屋の人がこの店のことを言ってたんですよ。かわいい女の子がやってるいい花屋があるって。それでちょっと寄ったんです」
「もう、ルージさんったら……」
アリアは頬を赤く染めながらいやいやするように首を振る。
「ところでさっきから気になってたんですけど、この甘い匂いは何なんですか？　そこの通りでも匂ってたんですけど」
「ああ、多分、これのことですね」
そう言ってアリアはカウンターの下からバケツのようなサイズの茶色い鉢を取り出しカウンターの上にドンッと置いた。途端に例の香りがぶわっと押し寄せる。
「これは……？」
鉢に生えていたのは花弁が真っ黒な花だった。花弁の数は七枚で、大きさは八センチくらいのものから三センチ程のものまでとばらば

ら。しかも一片一片に赤い斑点が付いていて、葉が一枚もなく茎は白という、明らかに常軌を逸した代物だった。
　アリアはそれを鉢越しに撫でながら寂しそうに話す。
「これは黄泉歩きの花といって、この花を調合してできた薬はどんな病でも治すことができるんです」
「へぇ、すごい花なんですね。じゃあこれを売ったら結構な額になるんじゃ？」
「ええ、でも売る気はないんです。これは母に必要なものですから……」
「母？」
　リードが聞き返すとアリアはしまったというような表情をした。知られたくないことだったのだろうが、それでもリードはもう一度尋ねた。
「お母さんがどうかされたんですか？」
「……」
　アリアは話す気がないのか黙って俯いていたが、目の前の少年は話すまで動かないと感じたのか、しばらくするとポツリポツリと話し始めた。
「……この店の名前、知っていますか？」
「セリネの庭、ですよね」
「ええ。セリネとはわたしの母の名なんです。二十年前に母はここでこの店を開業して、父と二人で続けてきました。わたしも小さいながらも二人を手伝い、裕福ではないけれども幸せな生活をすごしていました。ですが一年前、母が突然倒れたんです。医者に行っても理由が分からず、仕方なく父とわたしは母を連れて王都へ行き、そこで医者に診てもらったんですが……」
「原因が分からなかったんですか？」
　いえ、とアリアは暗い表情で首を振った。
「原因は分かりました。ですが、そのための治療薬の値段は二百万ジェム……この家にそんな蓄えはありません。その日その日で大変

でしたから。ザリアスの医療機関に入院させておけば少なくとも病の進行は遅くなるので母を王都に残し、父は他所の町へ出稼ぎに行きました。ですが、父の稼ぎでは足らず、母の治療費は払えないし、その時に医者に聞いた話ではもって一年と半年と言われて……だからこの花を……」

泣き出したアリアにリードは少し慌てる。

「で、でもこの花はできたんですよね。ならこれで助かるんじゃ……」

「駄目なんです。王都行きの馬車は少なくとも二月先……。一月前に届いた王都の医者からの手紙ではもう長くないと、そう書かれていたんです。もう、母を助けることは……うぅ……」

「……」

アリアはしばらくの間泣き続けると、エプロンで目元を拭うとにっこりと笑った。

「すいません、お客さまにこんな辛気臭い話を聞かせてしまって。今のは忘れてください」

仕事で笑顔を作ることには慣れているのだろうが、それでも赤く腫れあがった目はごまかせない。

関係のないリードに気にかけまいとしているのだろうが、それが逆に痛々しい。孤児で仲間達と育ったリードだからこそ、家族の大切さは身に染みてよく知っている。その大切な家族を失いかけているにも関わらずどうすることもできない人が目の前にいるのに、それを見なかったことにすることはリードにはできなかった。

リードは意を決して口を開く。

「その黄泉歩きの花、俺に預けてもらえませんか……？」

「え……？」

「俺、これから王都に向かうんです。その花を王都に持っていく手段がないんだったら、俺が持って行きます」

「でも……」

アリアは逡巡している。それはそうだろう、今日会ったばかりの

人間に母の命を預けろと言われているようなものなのだから。それにものがものなだけに、簡単に渡せるような代物でもないのだ。
　アリアの様子からそれを察したリードは右腕に嵌めていたものを外し、コトンとカウンターに置いた。アリアはそれを手に取り、手の中で回しながら眺め、表面に彫られた五つの名前を読み上げる。
「アレックス、ネリス、カイン、ハーツ、ユリア……。これは？」
「俺が旅に出る前にくれた、兄弟達からの贈り物です。金としての価値も、他者にとっての価値もないものですけど、俺にとっては最高に価値のある、掛け替えのないものです。俺の覚悟としてそれをアリアさんに預けます。だから、アリアさんのお母さんを助ける手伝いをさせてくれませんか」
「どうしてそこまで……言ってしまえば、あなたは私達と何の関わりもないんですよ？　自身の宝を渡してまでする理由がどこにあるんですか」
　アリアは正直、木製の腕輪を出されたことでさらに疑っていた。リードの言うとおり、この腕輪には金としての価値はない。高い香木で作られているわけでも、美しい細工がされているわけでものない、そこらに生えている木に子供が名前を削りこんだだけのような代物だ。そこらの露店でなら五十ジェム程で売っていてもおかしくない程度のもの。それに比べて黄泉歩きの花は栽培が難しく、その薬としての効果から考えても二十万ジェムは下らない。黄泉歩きの花を手に入れるためにそんなことを口にしているのだと思ったのだが、
「俺は元々孤児で、ある孤児院の院長に拾われて育ててもらってきたんです。だから、本当の親ってものは分かりません。でも、血が繋がっていない者達の集まりで作られた家族の中で生きてきたからこそ、家族ってものの大切さを知っているんです。だから家族を失おうとしているアリアさんを放っておけないんです！　お願いです、その花をザリアスに届ける手段がないなら、俺にやらせてください！　何が何でも必ず届けて見せますから！」

リードの目は真剣で、真実で、真摯だった。他人の思考を読む術に長けていないアリアでもわかった。そして思った。
ああ、この少年は、本当にわたし達のことを思って言ってくれているんだ、と。途端に今の今まで彼を疑っていた自分が恥ずかしくなり、同時に彼の気持ちが嬉しくてどっと涙を溢れさせる。
「ア、アリアさん！？」
「すいません、何でもないんです、何でも……」
アリアは再びエプロンで涙を拭い去ると、今度は腰を直角に曲げて頭を下げた。その勢いに乗って三角巾で抑えられていない後頭部の茶色い紙がバサッと音を立てて垂れる。
「お願いします。母を……助けてください！」
「分かりました。必ず届けて見せます」
アリアはその言葉に頭を上げ、感謝の言葉を告げると黄泉歩きの花を鋏で切り始めた。なんでも、この花は土に触れていないとすぐに枯れてしまうのだが、花弁、茎、根に分けておくと十日は保つらしい。ばらばらにした黄泉歩きの花を袋に入れ、リードが渡した木の腕輪と一緒に差し出した。
リードが戸惑っているとアリアはにっこりと笑って見せた。
「あなたの目を見れば分かります。わたし達親子のためになさってくださろうとしている、善意の覚悟が。だから、それを預けていただく必要はありません。それとこれを」
アリアはカウンターの下からあるものを取り出した。乾燥した白色の花を編んで作られた球状のものだった。乾燥していてなお花独特の甘い香りを漂わせている。
「これはホーリースフィアといって、隕獣が嫌う匂いを持っているんです。それを持っていれば、数日間は隕獣にも遭遇する可能性は下がるんです」
「こんなもの、もらっていいんですか？　結構高いんじゃ……いくらですか」
慌てて財布を取り出そうとするリードをアリアは首を振って止め

る。
「そんな高いものじゃありませんし、わたしにできるのはこれくらいですから……」
そう言ってアリアは弱々しく微笑んだ。
「これが狩猟の証と、シェルジェンテ討伐の報酬にならります。お気をつけて」
セリネの庭を出てギルドに行くと、既に登録が完了されていた。受付のお姉さんからカードと報酬が入った袋を手にギルドを後にし、消耗した道具（アイテム）を買いに、ギルドで場所を聞いておいた雑貨屋へ向かいながらカードを眺める。名前と歳が書いてあり、その下にランクFと書かれ、そしてその横には何故かリードの顔写真が貼られていた。一体いつ撮ったのだろうか。
些か不気味に思いつつ、もらった袋の中身を覗く。
「二千ジェム……結構もらえたな」
これならもっといい剣を買っておくべきだったか？　と後悔しながら雑貨屋で消耗した薬草や隕獣を攻撃する消耗武器、傷んだ調理器具を買い漁り、バッグを背負って街の外へと向かう。
（必ず、必ずアリアさんのお母さんのところに届けてみせる。絶対に死なせたりしない）
背中に黄泉歩きの花を存在を感じつつ、まだ見ぬ王都を見つめてリードはバッグの肩紐を握り締めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6849q/

碧い閃光

2011年2月6日12時35分発行